

キューバで考えたこと

キューバへ向かう機内でこの原稿を書いている。キューバへの出張は今年で2回目、通算では10回を超える。何故キューバなのか？キューバには様々なタイプのK-T境界層が存在するからである。なかには400mにも達する厚さのものがある。(12月18日現在もキューバで調査中だが、その最新情報では500mにちかい。)アメリカの庭のような位置関係にありながら、K-T境界層研究のニューフロンティアが現在に至るまで、殆ど手付かずで残されていたのは幸運としかいいようがない。アメリカの経済封鎖さまさまである。しかし今年はその事態もそろそろ終焉するのではないかという予兆を感じさせる。キューバの社会が変化の胎動を始めたからである。

ベルリンの壁の崩壊を例に出すまでもなく、変化の胎動が始まると変化は堰を切ったようにドラスティックに進み始めることが多い。アメリカとの国交が回復すればどっとアメリカの科学者が入ってくる。その前に少なくともおいしい部分の調査だけは終えようと、足繁くキューバに通っているのである。

科学者が国家の衰亡と深く関わっていることは言うまでもない。旧ソ連時代の科学者は、少なくとも国家の崩壊が囁かれるようになるまでは、それでもまだ、アメリカに対抗するだけの豊かさに恵まれていた。しかし国の崩壊と同時に科学もまた崩壊した。キューバの場合、国は崩壊していないが貧しいが故に、科学もまた貧困に喘いでいる。例えば地質学者は、交通費(ガソリン代)と宿泊費がないが故に、自国であってもフィールドに出かけられない。分析機器はいつの時代の物かさえわからない。もちろん科学技術として国に富をもたらす可能性のある分野は例外である。かつては地質学もそうであったのだ。今ではバイオテクノロジーがそうである。ちなみに科学者の月給はアメリカドルに換算して月15ドル程度である。停電と断水が当たり前で、生活用品は食料も含めて配給という国で、K-T境界層という宝の山の存在意義を強調するのは難しい。

社会の豊かさに直結しない学問は結局、資本主義国家であれ、国が貧すれば切り捨てられてゆく。我が国で天文学や惑星科学の新しいプロジェクトが毎年のように更新されていくのは、我が国がまだ十分に豊かであることを示している。しかしそれにかげりが見えることは、国立大学の独立行政法人化の動きを見れば読み取れる。惑星科学の未来はそれ程明るくないかもしれないのだ。惑星科学会の構成員はそのことの危機感を共有しているのだろうか？

松井孝典(東京大学大学院新領域創成科学研究科)

Takafumi Matsui (Graduate School of Frontier Sciences, Univ. of Tokyo)